

恋 心

福富雅樹【著】

その夜は肌寒かった。とかく、このところの暖冬で、厚着をすっかり忘れていた私にはこの急な寒さは応えた。

駅から十五分も歩く自宅に着いた時、すでに息は真っ白くなり、手はかじれ、耳は生爪を剥されたようにひりひりとして、真っ赤になっていた。

窓からは明りが洩れていた。台所の辺りだ。今ごろ、妻や子供たちは食事をしているのだろうか。

私は静かにドアを開けた。玄関は薄暗い閑静とした景色であった。私は明りも付けず、靴を脱ぎ、台所へと歩いた。

台所からは楽しそうな会話が聞こえてきた。私が台所に入っても、家族は私には全く気づかない様子で、食事をしながら話していた。

しばらくして、妻が私の存在に気づき、ちよつと他人でも見るかのような目をして、「おかえりなさい」といった。

私はなんとなく微笑んで、「ただいま」といった。

子供たち二人は厄介者が帰ってきたなあ、と言わんばかりの視線を送って、

「お帰りなさい」と小声で言った。

私が入った途端、台所は何か冷たい空間に変わってしまった。長くいればいるほど、その重苦しい空気と沈黙が体にどつとのしかかる。

食事が済むと子供たちは私を障害物か何かのように避けて、さっさと二階を逃げて行ってしまう。後には私と妻だけが残った。

妻は「どうして家に入る前にベルを鳴らさなかったのか」とは聞かなかった。別に聞いてほしいと思つたわけではないが、私のこの失礼な行動に何の怒りも覚えず、日常的なことと思つている妻が齒がゆくてならなかった。昔は——少なくとも昔は、こんなことはなかった。ベルを押して、家に入れば、家族みんなで明るく迎えてくれた。ところが、最近ではベルを押して、家に入つても玄関には誰一人姿を現さない。というのも妻はどこかへ出かけて、いないことが多いし、子供たちは部屋でゲームに熱中していて、私が帰ってきたことにも全く気づかないからだ。

今日みたいにみなのお食事をしている様子を見ると言うのは久しぶりのことだつた。

「今日はどこへも行かないのか」

言いたくはなかったが、つい口に出てしまった。

「私がいはいけないんですか」

妻は食器を洗いながら、つつかかるといふように答えた。

「いや、そういうわけじゃ……ただ、いつも出かけてるから」

この一言がまずかった。妻は振り返って、キツと私をにらみつけた。

「いつもですって！昨日は家にずっといたわよ。おとといは友達の誘いでちよつとでかけたけど、その前はいたわ！大体、あなた、人のことが言える。年中、接待だとか言つて、ゴルフに行ったり、飲みに行ったり。私にだつてね、少しは自由をくれたつていいでしょう」

妻は一方的に私は怒鳴り散らした。全くよく舌の回る女だ。

私には返す言葉もなかった。元々、私は臆病で、こういう口喧嘩をすると、体が極端に震えるのだった。

「悪かつたよ」

私は謝つた。

弱いくせに刃向かうんじゃないわよ、と言つた傲慢な顔をして、また食器を洗い始めた。

私はとぼとぼと自分の部屋へ入って行つた。いつからか私と妻の部屋は別々の部屋となつている。

私は引きっぱなしの冷たい布団の上に横たわつた。まるでアパート暮しのようだ。いや、今はそれよりもひどい。あの頃は夢があつたが、今は働いても働いても金はすべて家族に吸い尽くされ、自分の体だけがかろうじて残るだけ。

ああ、死んでしまいたいよ。

私は布団を被つて、その夜は恥も外聞もなく泣いた。

二

翌朝、私が職場近くの喫茶店で食事をしていると、水上早苗が私に声をかけた。彼女は職場の同僚だが、プライベートで話したことはほとんどなかった。

「松木さん、おはようございます」

早苗が元気よく挨拶した。

「ああ、おはよう」

私は無理に笑顔を作った。

「朝食ですか」

「まあね」

「御一緒してもよろしいですか」

「え？いいけど……でも、僕なんかと」

私がぶつぶつ言っている間に、早苗はさっさと向い側に座り、ウエイトレスに注文している。

「いつも、ここで食事してるんですか」

「うん」

「私、ここで朝食を食べるの始めてなんです。いつもは妹と家で食べるんですけど、妹は今、修学旅行に行っているんです」

「ふうん」

私は早苗の明るい顔をじつ見つめていた。家族がこんな明るい笑顔で私を迎えてくれたら、どんなに心が晴れるだろう。

「松木さん、私の顔に何かついてますか」

「い、いや、君の顔がかわいいもんだから……あ、いや、別に深い意味はない

んだ」

私は自分で言つて、自分で弁解していた。

「やだわ、松木さんたら。奥さんに怒られるわよ」

早苗が照れたように言つた。

「……」

私は黙り込んだ。

「私、何か気にさわつたことでも。そういうば、松木さん、奥さんがいるのにどうしてつくつてもらわれないんですか」

早苗がちよつと心配そうに言う

「ちよつとね、事情があつて」

私はか細い声でやつと返事をした。

三

家に帰つた時、やはり私を待っていたのは冷たい閑静とした玄関であつた。妻はまた外出しているようだった。妻の愛用の紅いヒールがない。

私は自分の部屋のハンガーに背広をかけた後、ふと思い立って二階へ上がった。二階には二つの子ども部屋と妻の部屋がある。

私は長女の明美の部屋のドアをノックした。明美は今年で十四歳になる。

「入っていいか？」

私がドアごしに尋ねると、

「どうぞ」

ちよつと不機嫌な声が返ってきた。

私は部屋に入った。明美は机に向かっていたが、勉強している様子はなかった。

「何か用？」

明美は振り向いて言った。

「いや、帰ってきてきたことを知らせようと思つて」

「ふうん、そう」

明美はまた何事もなかったかのように机に向かった。

「この椅子に座っていいかな」

「座れば」

「そ、そうするよ」

私はただ作り笑いをしながら、そばの椅子に座った。

「勉強してるのかい」

「そうよ。明日、テストがあるから」

「そうか、でも、ちよつと話をしないか」

「話……」

明美はちよつと嫌そうな顔をしながら、振り向いた。「ちよつとだけだよ」

「哲夫はいるのかな」

「いるでしょ。相変わらず、テレビゲームに熱中してるわよ」

「お母さんは？」

「お出かけ。わかつてるでしょ、毎度のことなんだから」

「夕食はとったのか？」

「ううん、まだよ」

「じゃあ、一緒に食べに行こうか」

「いいよ、面倒くさいから。何か頼もうよ」

「たまにはいいじゃないか」

「だったら哲夫と行ったら。私は家にいるわ」

結局、その後は勉強で忙しいからといって部屋を追い出されてしまった。しかたなく、哲夫の部屋へ行った。だが、哲夫もまたゲームに熱中しているらしく、ろくに私の顔も見ずに「行かないよ」と冷たい返事をした。

私は寂しく下へ降りた。子供たちは食事に行くのが嫌なのではなく、私と行くのが嫌なのだ。これが妻だと喜んでついて行く。また、会話にしても妻なら子供たちは何でも喜んで打ち明ける癖に、私とだとぶすつとした顔をして、皮肉混じりの返事をするだけ。

子供たちは私を人間ではなく、給料を運んでくるロボットくらいにしか思っていない。それもこれも妻のせいだ。妻は私のいない間に子供たちに私の欠点ばかりを吹き込み、ご機嫌をとりながら飼育している。妻にしてみれば子供たちは私を苦しめるための武器なのだ。

結婚して十五年。新婚の時はあんなに楽しかったのに、いつからこんなに仲が冷えきってしまったのだろう。私は確かに会社のために残業や上司との付き合いで、家庭を少しは犠牲にしてきたかもしれない。しかし、それは全て家族のためだ。出世をすれば、家族が喜んでくれる。そう思えばこそ、一生懸命働

いているんじゃないか。なのにどうしてこんな家庭になってしまったんだ。これでは牢獄じゃないか。

結局、その夜は何も食べなかった。

四

「松木さん、かわいそう」

ピザを食べながら、早苗は同情的に言った。

翌朝、昨日と同じ喫茶店で食事をとっていると、早苗がいつもの明るい笑顔で声をかけてきたので、精神が衰弱していた私は思わず家族のことで泣き言を言ってしまった。

三十七にもなつて、こんな若い女性に家庭の相談をもちかけるのは何ともみづともないことだが、意外にも早苗は笑うことなく親身に聞いてくれた。

「僕は情けないよ」

私は自分を卑下するように言った。

「そんなことはありませんよ。松木さんは仕事はできるし、思いやりはあるし。

私としては申し分ないわ」

「そう言ってくれるのは君だけだよ」

私は苦笑した。

「そんなことありません」

突然、早苗の目が真剣になった。

「ど、どうしたの？」

私はあつげにとられて言った。

「私、奥さんと別れた方がいいと思います。このままじゃ松木さんの人生おしまいですよ」

「別れることはできないよ。妻はともかく、子供が二人を路頭に迷わせるわけには行かない」

「私が引き取ります」

早苗がテーブルを叩いて断言した。

「ちよ、ちよっと、待って。君は何を言ってるんだい」

「プロポーズしてるんです」

「プロポーズ？」

「私、前から松木さんのこと好きだったんです。でも、松木さん、なかなか私にアプローチかけないから」

「冗談を言ってるんだろう。僕を励まそうとして」

「冗談でこんなことが言えますか」

「しかし……」

私は早苗の積極性に圧倒されて、言葉に詰まった。——彼女の言っていることは本当なんだろうか。いや、まさか。きつと、からかっているんだ。

「どうしました？」

「仮に君と結婚したくても、女房が別れてくれないよ」

私は遠回しに断わった。

「慰謝料出せば、大丈夫。第一、私と関係を持つちゃえば、奥さんも離婚するしかないと思うわ」

「そんな強引だよ」

私は十代の少年のようにあたふたした。

「私のこと、嫌いですか？」

「嫌いも何も、昨日、初めて話したばかりじゃないか」

「嫌なんですか」

「あ、ああ」

彼女には悪いと思ったが、私のような男とつきあつて彼女の人生を狂わすわけにはいかない。

「そうですか」

「諦めたかい？」

「いいえ。松木さんつて優しいんですね。ますます好きになつちやいました」

午後七時、仕事が終わりに箱田物産を退社すると入口の前には早苗が立っていた。

「一緒に帰りましょう」

早苗は小さな声で言った。

「でも……」

私が洩ると早苗は大胆にも私の腕をぎゅつとつかんで、

「お願い、あなたのことが好きなの。嘘じゃないのよ」

早苗が真剣な眼差しで言うので、私は断わることができなかつた。

「食事に行こうか」

「ええ」

どうせ家に帰っても、妻はいないし、食事の支度もしてないんだ。

私は駅近くのデパートのレストランで食事をした。レストランといつてもファミリーレストランで、たいして美味しい料理は食べられなかつたが、早苗との会話で楽しい一時を過ごすことができた。

早苗はレストランを出ても、帰る様子はなかつた。自分からは何も言わず、私の言葉を待っている。

これからどこへ行こうか……ホテル……いや、駄目だ。えっと、そうだ、映画がいい。「映画に行こう」

「ええ」

早苗と私は映画館に入った。そこで恋愛映画を観た。これは私の趣味ではなく、時間帯がたまに一致しただけである。

私は上映中、これからのことを考えていた。

彼女は明らかに私と関係を持つようとしている。遊び半分ではなく、本気でだ。

私は彼女の誘惑を断ち切るだけの力はない。もう家庭と彼女を天秤にかけること事態、無意味になってきている。

別に離婚したからといって、今の私には抵抗なんか何もない。妻だつて離婚できるとなれば、慰謝料が取れると大喜びだろうし、子供たちだつて私が父親であることなど望んではないんだ。

「松木さん——松木さん」

早苗の声で私は我に帰った。

「え、あ、どうしたの？」

「どうしたのじゃないわ。映画、終わったわよ」

早苗はクスツと笑いながら言った。

「あ、ごめん、じゃあ、出ようか」

私は早苗を連れて、映画館を出た。そして、しばらく夜道を歩いた。時計は午後九時を回っていた。

私は早苗が話しかけるまで黙っていた。どうしても彼女をホテルへ誘うなどといった大それた真似はできなかつた。

私と早苗はいつしか繁華街を外れ、閑静な住宅街を歩いていた。

私はただ早苗の後を従って、歩いてきただけなので、なぜ早苗がこの道を歩いているのかわからなかった。

駅とはまるで反対の道だった。

「ねえ、松木さん」

早苗が立ち止まった。

「な、なに」

私は早苗が何を言うのか、柄にもなく胸をドキドキさせながら言った。

「この近くに私のマンションがあるんです」

「え？」

「今日も妹、修学旅行で留守なんですよ」

「それが何か？」

「ちよつと寄って行きませんか？」

早苗は私を見つめた。

「しかし……」

私は渋った。

「私を愛してるのなら、お願い」

早苗は私の腕をつかんだ。

「わ、わかったよ」

ついに私の良心のたがが外れてしまった。これでもう妻と子どもたちとの関係が絶つことになってしまふのだ。

私はもう催眠術にでもかかったように、早苗の腕に引つ張られて歩いていった。その時だった。私と早苗を二つの光が包み込んだ。一台の乗用車がもうスピードで走ってきたのだ。

私はとつさのことで体が膠着し、その場に棒立ちとなっていた。

車は私と早苗の横に急ブレーキをかけて止まると、前部のドアが開いて、中から何者かの手が現れて、早苗を無理矢理、車に引きずり込んだ。

「松木さん！」

早苗の呼ぶ声がしたが、私はそれを黙って見ているしかなかった。

車は早苗を乗せるや、すぐさま走り去った。

私は車が出て行っても、その一瞬の出来事にまだ反応できないでいた。

五

「ちよつと何すんのよ」

早苗は車内で運転している男の顔をひっぱたいた。

男は静かに車を止めた。

「おまえは何を考えているんだ」

南原は早苗の方を向いて、呆れた様子で言った。

「私が何しようと思手でしょ」

早苗はまだ興奮冷めやらぬ様子で言った。

「人の家庭を壊してもか」

南原が言うと、早苗はちよつと視線を落とした。

「そんなことはあなたには関係ないわ」

「まあな。だが、君が今、やろうとしてることにはどうも賛成できなくてね。

邪魔させてもらったのさ」

「何のことよ？」

「ふふ、とぼけても駄目さ。考えてみれば、君が突然探偵をやめるといって事務所を離れてから、四カ月。俺も君の真意を確かめたくて、時々、君の動向を

伺っていたんだ」

「相変わらず嫌らしい性格ね」

「君はあの男をどうするつもりだ」

「結婚するわ」

「なぜ？」

「愛してるからよ」

「だが、今、君が連れていこうとしたマンションは松木の奥さんが浮気している男のそこじやないのか」

「どうしてそれを」

「俺は探偵だからな。そのくらいは朝飯前さ」

「つくづく、やな性格ね。そうよ、あなたの言うとおり。あのマンションにはちようど男と奥さんがいる頃だから、松木さんを見せてあげようと思ったの」

「それで一気に離婚を成立させ、自分が松木の妻になろうというのか」

「そうよ」

「本気なのか」

南原は早苗を真剣な眼差しで見つめた。

「ええ。私、松木さんに一目惚れしてしまったの」
「そうか」

南原は早苗から目を離して、シートに深くもたれた。
「じゃあ、私は降りるわ」

早苗はドアを開けた。

「結婚式には招待してくれよな、早苗さん」

「もちろんよ、南原さん」

と言つて早苗は車を降りた。

「幸せを祈つてるよ」

南原は外の早苗に声をかけた。

「どうも。南原さんもお元気で」

「ああ」

「それじゃあ、さよなら」

早苗は小さく手を振つて、その場を去つていった。

「さてと、仕事を始めるか」

南原はニヤリと笑いを浮かべて、車を走らせた。

私は何と情けない男なんだ。目の前にいながら早苗を助けることもできず、むぎむぎと車の男に連れ去られてしまった。あの男は何者なんだろうか。

どうしよう、警察へ知らせるべきだろうか。いや、そんなことしたら私がなぜ彼女と一緒にいたかを疑われてしまう。だが、もしあの男が誘拐犯なら彼女の命に関わるんだ。やはり、警察へ知らせよう。

私は意を決して、警察へ電話しようと思ったが、この辺には全く公衆電話は見あたらなかった。仕方なしに私はしばらくこの静寂とした道を歩き続けた。

途中、誰ともすれ違うことはなかった。私は彼女の身に危険が迫っているかも知れないというのに冷静だった。警察に電話をしようと思えば、近くの家で電話を借りればいいのに、あえてそれをせず、そして、公衆電話へ向かう足取りも早けれど、走るといふことはなかった。私はもしかすると彼女がこのままいなくなることを望んでいるのかも知れない。それは実に恐ろしい考えだが、なぜか今の私にはそれを否定することができなかった。

住宅街を抜け、ようやくビルやマンションの立ち並ぶ道に入った。恐らく早

苗のマンションはこのどこかにあるに違いない。

私は上空の夜景を見ながら、歩いていった。公衆電話にたどり着きたくないという思いがやはり募っていた。

その時だった。

ドンツと何かにぶつかり、気を抜いていた私はあっさりその場に尻餅をついた。私の目の前に男女のカップルがいた。

「どこ見てんだ」

男は私をにらみつけた。三十前後の男で、私に比べると体格も顔立ちもよかつた。

「す、すみません」

私は手の砂を払って、ゆつくりと腰を上げた時、ふと男の隣の女を見た。

「理恵……」

目の前にいたのは紛れもない私の妻だった。妻の方も私の顔を見て、驚き、慌てて男の背中に身を隠した。

「どうした？」

男が妻に尋ねると、妻は息を呑んで答えた。

「わ、私の夫よ……」

「理恵、おまえ、こんな男と……」

私は妻の前に歩み寄った。

「あなた、どうしてここに。私をつけてきたのね、最低だわ」

妻は私を罵った。

「浮気なんかして、どういいうつもりだ」

私は怒鳴った。

「あなたこそ、人のことが言えて」

「何だと」

私は嫌な予感がした。

「これよ」

妻はバッグから写真を撮り出した。それは早苗と私が食事をしている写真だった。いつの間にこんな写真を。この写真はこの間の喫茶店でのものだ。

「彼女は関係ない」

「へえ、もう彼女とか言う間柄なのね。これで離婚は決まりね」

妻は待っていたかのようにその台詞を吐いた。

「ま、待ってくれ。離婚なんてそんな。子供たちはどうするんだ」

私は妻の浮気を問いただすこともできず弱腰になっていた。

「私が引き取るわ。この人も了解してくれたの」

妻が男に抱きついた。

「さあ、話が済んだら、さっさと帰んな」

男は私を突き飛ばした。

私は反抗する力もなく、ただその場に立っていた。

「さあ、行こうぜ」

男は妻を連れてその場を去って行った。妻は全く私に振り向かなかつた。

「畜生……」

私はアスファルトの冷たい舗道を何度も叩きながら、自分の無様な姿を呪った。

六

「明美ちゃんだね」

明美が弟と一緒に家を出たところで、南原は声をかけた。

「誰ですか」

「君のお父さんの会社の知合いなんだが——」

「父なら昨日は帰りませんでした」

「いや、君に用があるんだ。ここでいいから、五分ほど時間をもらえないかな」

「でも、学校が」

明美が困った顔をする、

「いざとなったら、車で送ってあげるから」

と南原は説得した。

「わかりました。——哲夫、先に行きなさい」

と明美が言う、

「やだあ、僕も車乗りたい」

「わがまま言うんじゃないの。言うこと聞かないと、今日の夕食、抜きだから

ね」

「わかったよ」

哲夫はふてくされた顔をしながらも、ランドセルをしよって、とぼとぼと歩

いて行つた。

「どういふ御用件でしょうか」

明美は南原を見上げて言つた。彼女の髪は肩ほどまであつて、さらさらとした艶のある髪だつた。顔立ちは美人ではあるが、ややきつい印象を与えた。そして、性格的にも芯が通つていて、気の強い娘のようである。

「最近、君のお父さんが元気がないようなんですね、何かあつたのかと思つて」
「何もありません」

明美はきつぱりと言つた。

「でも、お父さん、かなり深刻に悩んでる様子だつただけだね。本当は家庭で何かあつたんじやない」

「ありません」

「本当に？」

「本当です。用が済んだんなら、学校へ行きますから」

明美は鞆を右手に持ちかえて、南原を無視して歩いて行こうとした。

「待ちなよ」

南原は明美の肩をつかんだ。

「放して下さい」

明美は南原をキツとにらんだ。

なんて悲しい目をしてるんだ、この娘は

南原は明美の肩から手を離れた。

「悪かった。正直に言おう。僕はお父さんの知合いではないんだ」

「え？」

「僕は探偵だ」

南原は明美に名刺を渡した。

「南原……光次郎？ いったい、何を調べてるんですか」

「そいつは言えない。だが、一つ君に聞いておきたいことがあるんだ」

「何でしょうか」

「お父さんとお母さんがもし離婚したらどうする？」

南原は明美の顔をじつと見ながら、尋ねた。

明美はしばらく黙っていた。彼女は自分の感情を顔に出さないよう必死に抑えていた。「答えなくてもいいよ。君にこんな辛い質問のする方が間違ってたね」

南原は優しく言った。

「離婚するってことがあるんですか……」

明美は震えの混じった声で南原に尋ねた。

「いや、もしもの話さ」

「でも、おじさんはお父さんか、お母さんの浮気相手を調べてるんでしょう」

「だとしたら、君はどうする？」

「わたしは……わたしは……」

明美は答えようとするうちに顔色がどんどん青くなり、しつかりとした顔つきが崩れてきていた。

「もういいよ」

南原は慌てて明美を抱きしめ、彼女の顔を胸で覆い隠した。

「言う必要ないさ。本当におじさんが悪かった」

南原が明美の背中を軽く叩きながら、穏やかな声で慰めると、いつしか南原の胸で彼女の咽び泣く声が聞こえてきた。

翌朝、私はビジネスホテルから会社へ出勤した。

昨夜はとうとう家へは帰らなかった。別に帰らなかったところで、誰が心配するわけでもなく、それほど気にはならなかった。

むしろ、昨夜は自宅以上によく眠れた気がした。妻と男のことが気になって眠れないかとも思ったが、意外にあっさりと眠りについてしまった。もう私自身、妻のことを愛していないのかも知れない。

「松木さん」

私が一階でエレベーターを待っていると後ろから声がした。振り向くと、いつものままの早苗が立っていた。

「き、君、大丈夫だった」

私は慌てて言った。

「ああ、あれね、私の兄なの。ちよつと強引だから、時々、誘拐犯とかと間違えられるのよ」

「何だそうだったのか……でも、謝らなきゃ」

「なぜ？」

「仮に君のお兄さんだったとしても僕は君が連れ去られたのに、警察にも連絡せず、自分で捜そうとも思わなかつたんだ」

私は早苗に深く頭を下げた。

「いいのよ。気にしてないから。それより、今夜、昨日の埋め合せにまたつき合ってくださいませんか？」

「いや、それは……」

「都合が悪いんですの？」

私は迷った。正直言つて今日、早苗とつき合えば、肉体関係を持つ可能性は大きい。そうなれば、この先、彼女とは永遠に離れられなくなる。別に早苗が嫌いなわけではない。彼女はきれいだし、優しいし、明るい。妻と比べると大違いだ。だが、子供たちが両親が揃つて浮気しているなどということを知つたら、どうなるだろう。きつと深く傷つくはずだ。いや、子供たちは私のことが嫌いなんだ。別にどうなつたつていい。離婚したら離婚したで、多少、金がかつたつて、子供を妻に預けて、早苗と結婚すればいいんだ。

「どうしたの？黙り込んで？」

「今夜、つき合うよ」

「本当に？」

「ああ」

「よかった。——あつ、エレベーターが着いたわ。この話はまた昼休みね」と早苗はニコツと微笑んで言った。

「私がいんな悪いんです」

明美は弱々しい声で言った。

南原と明美は公園のブランコに座って話をしていた。公園はまだ朝方のせい
か、人の姿はほとんど見えない。

「そう自分を責めることはないさ」

南原は明美の横顔を見ながら言った。

「私、時々、自分が嫌になるんです。陰険で、わがままで、短気で……そのく
せ、泣き虫で」

「そう思うのなら、治せばいいじゃないか」

「できません……素直になればいいといくら思っても、駄目なんです」

明美は両側の鎖をぎゅつと握りしめた。

「そうか……でも、君は両親の離婚は嫌なんだろう」

南原の問いかけに明美は小さくうなずいた。

「だが、このままいけば、必ず離婚になるよ。僕が何もしなくてもね。そうなれば、君と哲夫君は離ればなれになるかも知れない」

明美はうつむきながら、南原の言葉を黙って聞いていた。

「家庭をつくるも壊すも家族次第だ。今、そのことに気づいているのは君だけだと思うよ」

南原はブランコから腰を上げると、明美の肩を軽く叩いた。「ちよつと話しすぎたようだ。さあ、学校まで送るよ」

「いいえ、一人でいきます」

明美もブランコから腰を上げると、南原に会釈一つせず、何かじつと考え込んでようにして、公園を出て行った。

明美は学校へ通学せず、そのまま公園から自宅に戻ってきた。

玄関には母親のハイヒールがあつた。

明美は鞆を玄関に投げ出し、台所へ行った。

「あら、明美、学校はどうしたの？」

母親の理恵は不機嫌な顔で言った。

理恵はちようど朝食を取っているところだった。おそらく、自分たちが学校へ行くのを見計らつて帰つてきたのだろうと明美は思った。

理恵の服装は昨日のまま、まだ帰つてきて間もないらしく、バッグや紙袋がテーブルの上に置いてあつた。

「お母さん、離婚するつてホントなの」

明美は険しい表情で母親を見た。

「離婚……」

理恵は一瞬、言葉に詰まったが、すぐに表情を取り戻し、「いずれわかることだから」といつて、穏やかに離婚の可能性があることを打ち明けた。

「どうして……」

南原から聞かされて知っていたとは言え、母に直接言われると、やはり明美

は悲しくなった。だが、それを表情には出さなかった。

「お父さんが浮気したの。前から薄々気づいていたんだけどね。会社の同僚の人よ」

「お父さんは浮気だって認めたの？」

「認めるも何も浮気があったのは事実なのよ」

「探偵に調べさせたから？」

「明美、どうして探偵のことなんか……。ええ、その通りよ。それなら明美にもわかるでしょ、お母さんの気持ち。浮気してる人と一緒にはどうしても住めないの」

理恵はしごく当然のように言った。

「わからないわ、そんな気持ちなんか！」

明美は感情的に怒鳴った。今まで母親に手向かったことのない明美がこの時だけは我を忘れていた。

「どうしたの、明美……」

突然の娘の言動に理恵は戸惑った。

「浮気に気づいていたんなら、何で止めてあげなかったのよ！」

「言つたつて、聞く人じゃないもの」

「ウソよ。お母さんは離婚するきつかけが欲しかったのよ」

「何てこと言うの」

理恵もついに怒り出した。「明美だつて、あんなにお父さんを嫌つてたでしよ。それにお父さんとお母さんの間はもう隔たりができてしまったの、仲直りはできないのよ」

「そんなの勝手だわ。私は絶対、いや！」

明美は大きく首を振った。

「明美、お願いだからわかつて。お母さんだつて辛いんだから」

「お父さんも離婚しようつて言つてるの？」

「ええ、そうよ」

「ひどいわ。私たちに何の相談もないわけ？」

「明美には悪いと思つてる。だから、本当なら折りを見て話そうと思つたのよ」

「その時にはどうせ離婚は成立してゐるんでしよ」

明美は皮肉っぽく言つた。

「明美！」

理恵は思わず明美の頬をひっぱたいた。

明美はジーンと熱くなる頬を押さえながら、理恵を鋭い目でにらんだ。

「ご、ごめんなさい、悪気があったわけじゃ……」

理恵は感情的になったことを反省した。

「もう……いいわ、勝手にすれば。離婚しなさいよ。でも、私はどっちにも行かないからね。お母さんも新しい男の人とせいぜい、お幸せに」

明美はそれだけ言うと、台所を飛び出して行った。

理恵の浮気相手、田崎はマンシヨンの六階に住んでいた。田崎は駅前のバーに勤めるバーテンダーで、理恵とはバーの客として会っているうちに、関係を持つようになった。田崎にとって理恵は女としての魅力よりも金に魅力があった。彼女は両親の遺産を相続していて意外に金を持っていた。マンシヨンをかう資金の一部も理恵が肩代りしていた。

ピンポーン。

チャイムの音で田崎はソファから腰を上げた。彼のそばのテーブルにはウイ

スキーとグラスが置いてある。彼は朝から酒を飲んでいたのである。彼は朝から酒を飲んでいたのである。無論、昨夜は理恵と寝ていたのである。

「理恵の奴かな」

田崎は重い足取りで、玄関に歩いて行った。

ドアの覗き穴を覗かず、無造作にチェーンを外して、ドアを開けた。そこには男が立っていた。

「あんた、誰だい？」

田崎がそう言うや否や、いきなり男の拳が田崎の顔にヒットした。田崎が後ろに倒れた。

「な、何しやがる」

田崎は怒鳴った。

「俺は南原っていうもんだ」

南原は田崎の前に名刺を投げた。田崎は名刺を見た。

「探偵が何の用だ」

「松木理恵と別れな」

「理恵と……ふざけるな」

田崎は立ち上がった、南原に殴りかかった。だが、逆にカウンターパンチが田崎の顎をえぐった。

「うがあっ」

田崎は顎を押さえながら、逃げるように部屋の奥へ引つ込んだ。

南原は土足で田崎を追うように入って行く。

南原が居間に入った時、田崎はサバイバルナイフを構えて立っていた。

「畜生！殺してやる」

田崎はにやりと笑って行った。

「そんなナイフじゃ俺は刺せんよ」

南原は眉一つ動かさず言った。

「だったら試してやるぜ」

田崎は南原の懐に飛び込んだ。

「ん」

勢いよく飛び込んだにもかかわらず、ナイフは南原の腹に一センチも刺さっていないかった。

「てめえの力じゃ防弾チョッキは通せねえよ」

すかさず、南原の肘が田崎の後頭部を襲った。

田崎は低くうめくと、南原の足元にひれ伏した。

南原は田崎の手を足で踏んで、ナイフを離させると、さっとナイフを足で払って遠くへやった。そして、今度は田崎の頭に靴のかかとをぐいぐいと押し付け、

「理恵と別れるか？」

と訊いた。

「あ、あいつから言い寄ってきたんだ」

「だったら断われ。そのために口があるんだろ」

「わ、わかった。別れるよ」

「その言葉、信じるよ」

南原は懐のホルスターから拳銃を取り出した。

「信じてくれ」

田崎は苦しそうな声で言った。

「ウソついたらこうだぞ」

南原は足元に拳銃を発砲した。田崎の顔のすぐ目の前の床に弾丸が貫通する。

田崎は恐怖に目を見開いた。

「わかれます。わかれます」

田崎はうわごとのように言葉を繰り返した。

「大変、よろしい」

南原はニコツと笑って言った。

九

午後六時――

会社のビルの前で一足早く松木が出てくるのを待っていた早苗は、ビルの前で落ち着かない様子で会社の入口を見つめている少女の存在に気づいた。

あれ、もしかして。

早苗はその少女の顔に見覚えがあつた。無論、面識はないが、写真で見たのを思い出したのだった。

早苗はバッグの中からシステム手帳を取り出すと、その中のケースに入れておいた写真に目を通した。

やっぱりね、松木さんの長女、明美だわ。

早苗は明美に関する調査メモをチエックした。

松木明美、十四才。N第二中学校二年。成績はごく普通。性格は気が強いが、内向的。所属クラブはなし。

いったい何してるのかしら。なんて疑問に思うのも野暮ね。松木さんの会社の前にいるということは松木さんに会いにきたという以外、考えられないもの。

早苗はなんとなく明美と話がしてみたい気になった。しかし、自分から明美に声をかけると変に思われるので、結局はその少女の様子を黙ってみていた。

あの子がお父さんに会いにきたとすると、私が松木さんに会おうと厄介なことになるわね。でも、どうせ離婚させるんだから、どうでもいいわね。

早苗は比較的、楽観的に考えた。

私は一階へ降りるエレベーターの中で、これからのことばかり考えていた。

もし今夜、早苗とデートをすれば、確実に僕と早苗は結ばれる。そうなれば、離婚は決定的だ。いや、もう妻には男ができてるし、私と早苗の関係を執拗に

追求している以上、今夜のことがなくても離婚は避けられないのだ。私自身には離婚に不満はない。毎日、圧迫され続けた孤独な生活から解放されるのだから。

ただ、気がかりなのはこのまま子供たちに相談もなしに離婚をすることだった。仮に彼らが私を嫌っていたとしても、親が一人になると言うのは重大問題だ。私や妻の我がまままで決めていいことはない。やはり、一度は真剣に話し合わなければ駄目だ。

そんなことを考えているうちにエレベーターは一階に着いた。腕時計を見ると、六時十五分を指している。早苗とは六時の約束だから、やや早苗を待たせてしまったようだ。

私は会社を出た。外はもう薄暗くなっている。別に珍しいことではないのだが、朝、会社に来て、その日は会社からでないと、夜、外に出た時、別世界に来たような気がするのである。

なま暖かい部屋にずっといたせいとか、顔に風がくると、ひんやりとして気持ちがいい。「松木さん」

早苗が私に声をかけた。一瞬、早苗と待ち合わせをしていたことを忘れてい

た私は早苗の顔を見て、驚いた。

「どうしたの、そんなびつくりした顔して」

早苗はくすつと笑った。

「ちよつとぼんやりしてたもんだから」

早苗はやっぱりかわいかった。彼女を見てみると、なぜ私が理恵と結婚したのか不思議でならなかった。もつとも結婚前は理恵があんな横柄で、気が強く、自分勝手な女とは思っていなかった。一緒に暮らして初めて、その人間を知るといった感じであった。いま思うと、結婚したいばかりに理恵の我がままを何でも聞いて、甘やかした自分にも責任があるのかも知れない。だが、早苗は理恵とは違う。もし早苗と子供たちとで暮らしたら、きっと幸せな家庭が作れるに違いない。

「さあ、行きましょう」

早苗が私の腕に手をかけた。

「ああ」

私と早苗が歩きかけた時、誰かが私たちの前に立ちはだかった。

「明美……」

私は一瞬、目を疑った。

目の前には娘の明美が立っていたのだ。明美は憎しみに満ちた目で私をにらんでいた。だが、その目にはなぜか悲しみが宿っていた。いつもの明美の目ではなかった。

「明美、これはその……」

私はどう弁解していいかわからなかった。ただ何とか言葉を表に出そうとしているだけだった。

「お父さん……」

明美は微笑んだ。笑っているのは口元だけで、無理に作っているような笑顔だった。

「明美……」

私はこんなに苦しそうな表情の娘に何も言えない自分が腹立たしかった。

「ごめんね……お父さん」

明美はそれだけ言うと、振り返ることなく雑踏の中へ走って行った。

「松木さん」

早苗が声をかけた。

「今のが私の娘です」

「追いかけないでいいの？」

「いいんです。もう私の家庭は終わったんです」

十

電話が南原探偵事務所に鳴り響いた。事務所内は真つ暗だった。

「んっ……」

机に足を投げ出し、椅子に座って眠っていた南原はパツと目を覚ました。

南原は受話器を取った。

「南原探偵事務所だが――」

南原は目を擦りながら言った。

「南原さん……」

弱々しい少女の声が聞こえてきた。

「明美ちゃん……か」

南原は落ち着いた声で言った。

「あたし……失敗しちゃった」

明美は聞き取れないほどか細い声で言った。

南原は黙っていた。

「家庭、元に戻らない……わたしのせいね……」

「自分を責めるなどといっただろう。君、どこから電話をかけてるんだ？」

受話器から時々、車の音が聞こえてくることに南原は気づいた。

「もう疲れちゃった……」

明美は泣いているとも笑っているとも判断のつかないような声で言った。

「おい、場所を言うんだ」

「南原さん、いろいろ、ありがとう。わたし、人にこんなに素直になれたの初めてだった。南原さんがお父さんならなあ……」

明美は南原の言葉がまるで聞こえず、無意識にしゃべっている様子だった。

「わたし、今度、生まれ変わったら、いい子になります、きつと——ブツツ
電話が切れた。

「馬鹿野郎、そんな簡単に自殺はさせねえぞ」

南原は受話器を置くと、ハンガーに掛けたコートを無造作につかんで、事務

所を出ていった。

南原が松木の家に行った時、家には誰もいなかった。部屋の明りもついていない。松木や理恵はともかく、哲夫がいけないということはも明美が自殺の道連れに連れて言った可能性があると南原は考えた。

南原は針金を取り出して鍵穴に入れていじると、鍵はあっさり外れ、南原は家の中へ入った。

南原は二階へ上がった。大概、子供の部屋は二階にある。

南原は明美の部屋に入って、電気をつけた。

明美の部屋は十四才という女の子の部屋にしてはどこか寂しかった。勉強机やベッド、十四インチのテレビ、本棚、洋服ダンスなど最低限必要なものは全て置いてある。しかし、その部屋には松木明美の個性と言うものは全く感じられなかった。アイドルのポスターが壁に張つてあるわけでもなく、ぬいぐるみや人形、あるいはインテリアが置いてあるわけでもない。本棚はきちんと整頓されているが、そこには触れたという形跡がない。教科書やノートも使われてはいるが、新品同様にきれいで、表面に名前一つ書いていないと言う有様であった。

何かこの部屋に自分のいた跡を残したくない。明美のそんな思いが伝わってくる部屋であった。

南原は明美の行き先に手がかりを得ようと部屋を調べたが、めぼしいものは見つからなかった。

南原は明美の部屋を出て、一階に降りた。そして、居間を覗いてみた。

ここは父親の部屋らしかった。クリーニング店でもらったような針金のハンガーに背広とズボンが掛けてある。南原は電気をつけた。

ん？

ふとテーブルに白い封筒が置いてあるのを発見した。それを手にとると、そこには「お父さんへ」と書いてある。本人の名前はないが、恐らく明美だろう。

南原は封筒から手紙を抜き取って、文面に目を通した。

それは短い文章だったが、松木家の家庭崩壊の秘密を知るには、これだけで十分であった。

「帰んな」

田崎はマンションを訪ねてきた理恵が部屋に入ることを拒否した。

「どうしたの」

理恵は納得がいけないといった様子だった。

「おまえが嫌いになったんだよ」

田崎は妙によそよそしく、理恵が近づくのをおそれているかのようだった。

「うそよ、そんなの。ねえ、あなた、いったい何があったの？」

理恵は田崎に歩み寄った。

「何もねえよ。帰れ」

田崎は理恵の胸を強く突き飛ばした。理恵は後ろの壁まで飛ばされる。

「じゃあな」

田崎は玄関のドアを閉めようとした。しかし、理恵も必死になって、すかさずドアにしがみつく。

「帰れってんだ」

「いやよ！」

理恵は頑として、ドアから離れようとしなかった。

「おまえがいたんじや、迷惑なんだ」

田崎は怒鳴った。

「迷惑？」

「そうさ。いつまでもオバサンの相手をしてるのにアキアキしたんだ」

「何ですって！」

理恵はヒステリックな声を出して、とうとう田崎を押し退けて、部屋の中に入ってきた。

「じゃあ、今まで愛してるっていつてくれたのは嘘だったのね」

理恵は振り返って、田崎を見た。

「嘘も何も、初めからその気はなかったのさ」

「じゃあ、私を騙していたというの？」

「ああ」

「信じられないわ」

理恵の言葉に田崎はギクリとした。

「私を愛してる、といった時のあなたの目は本当だったもの。それに子供がいなくても、結婚するって言ってくれた。だから、私は夫と離婚する気になったのよ」

「それは……」

「何かあったのね。ねえ、私に話して……」

理恵は田崎をじつと見つめた。

田崎自身も心中では理恵を愛していただけに、この理恵の愛情の眼差しに動揺をしていた。

「理恵……実は……」

田崎は何かを言いかげようとしたが、すぐに口をつぐんだ。

「本当のことを言つて、私のことを愛してるんなら」

「理恵……」

田崎の心は大きく揺れていた。

「あなた」

理恵は田崎の胸に飛び込んだ。

「実は……」

田崎が真実を語ろうと口を微かに動かし、ドアが半開きの玄関に南原が姿を現した。田崎の表情が一変して真つ青になった。

「……女ができたんだ」

田崎は震えた声で言った。

「え？」

理恵は驚いた様子で田崎の顔を見上げた。

「若い女とつきあつてるんだ、金持ちの」

田崎は南原の方を気にしながら言った。

「そう……そうだったの」

理恵の声が一オクターブ高くなった。

理恵は田崎から離れると、台所へ歩いて行つた。

田崎はもう言うべき言葉もなく、ただただ理恵の様子を見ていた。

「ねえ、あなた」

理恵は妙に甘つたるい声を出して、台所から田崎の方へ歩いてくる。右手はなぜか後ろに隠していた。

「理恵……」

田崎は金縛りにあつたかのようにじつとしたまま、理恵を凝視していた。

「逃げろ！」

南原がドアを大きく明け、叫んだ。

田崎がはつと我に返った時、理恵の手には包丁が握られていた。

「殺してやる！」

理恵は金切り声を出して、田崎に襲いかかった。

「ひいっ！」

田崎はびっくりして、しゃがみ込み、間一髪、理恵の最初の一撃をかわした。

「よくも、よくも、私のことを……」

理恵はうわごとのように眩きながら、今度は包丁を逆に持って、頭上から田崎を刺そうとした。

「田崎、こっちへ来い」

南原の言葉に田崎ははつて南原の方へ逃げてくる。

「逃がさない……」

理恵もすかさず後を追いかける。

「な、南原さん」

田崎が情けない声をだして、南原の背後に回り込んだ。

「どいて！」

理恵は血走った目で、南原をにらみつけて言った。

「駄目だ」

南原は低い声で言った。

「その男を殺してやるんだから。どかないと、あんたも刺すわ」

理恵は息を弾ませながら言った。

「大人のすることじゃないぜ」

南原の言葉など無視して、理恵を包丁を構えて、南原の方へ飛びかかってくる。

南原は理恵が向かってきても動かなかつた。

しかし、理恵の包丁が南原の腹部の寸前までくると、さらりと左へ身を交わし、右手で理恵の包丁を持つ右手首をがっちりつかむと、すかさず左手の甲で包丁を叩き落とした。

「畜生！」

理恵はそれでも田崎の方へ向かって行く。

「目を覚ませ！」

南原は理恵を押し戻すと、理恵の頬に平手打ちを食らわせた。

理恵は頬を押え、顔を真っ赤にして南原を見つめた。そして、次の瞬間、緊

張の糸が切れたかのようにへなへなとその場に座り込んで、顔を覆って泣き出した。

「南原さん……」

田崎が南原に声をかける。

「おまえはどっかへ行け。もう、戻ってくるなよ」

「は、はい」

田崎はおずおずと逃げるように部屋を出て行った。

南原は壁に寄りかかりながら腕を組み、理恵が落ち着くのを待っていた。しばらくして、涙を拭いて、理恵は顔を上げた。

「落ち着いたか」

「ええ……あなたは誰なの？」

理恵は尋ねた。

「俺は探偵だ」

「探偵？」

「そう、正確にはあんたが雇った女探偵の相棒だ」

「じゃあ、あなたが南原さん？」

「ああ」

「どうして、あなたがここに？」

「あんたの娘の居所を聞きに来た」

「明美がどうかしたんですか」

「やれやれ」

南原は頭を横に振った。「俺はてつきり娘が家出したというのを知ってて、男のところに来たと思つたんだがな」

「家出したんですか」

理恵は立ち上がり、南原に歩み寄った。

「弟と一緒に。死ぬかも知れないぜ、あの娘は」

「まさか……」

「どうする。捜しに行くか？」

「もちろん、行きます」

「その前にあんたの主人にも連絡しとけ」

「主人……あの人はいいんです」

理恵は南原から目を背けて言った。

「なぜだ？自分が娘の家出に気付かなかつたのを責められるのが恐いんだろう」

「違うわ。あの人は冷たい人なの」

「最低の女だな、あんたは」

南原はそう言うと、ムツとして部屋を出ていった。一瞬、理恵は考え込んでいたが、すぐに南原の跡を追って行った。

とうとう、ここまで来てしまった。

いつもなら食事の後、それで別れるだけなのに……今はホテルの一室にいる。この部屋には私と早苗の二人。邪魔するものは何もない。もう後へは引けないところまで来ているのだ。後を引く？もう後へ引く理由などないのだ。早苗は明るいし、器量もいい。私にとっては理想のパートナーになってくれる。

ベッドに座る私の耳には浴室のシャワーの音だけが聞こえてくる。あの浴室には早苗がいる。裸の早苗が……

「松木さん……来て」

浴室から早苗の声がした。その声は電撃のように私をしびれさせた。体が堅

くなつて、動けなかつた。

「松木さん」

「はい」

私はぎこちない返事をして、立ち上がった。

そして、催眠術にかかつたように背広を脱ぎ、ネクタイを外し……そして、裸になつた。もう理恵の姿も明美の姿も哲夫の姿も私の脳裏にはよぎらなかつた。ただ浴室で待つている早苗の姿だけが私の頭の中で渦巻いていた。

私は浴室のドアのノブを握つた。スリガラスを通して早苗の肌色の像が見える。

ゴクリと私は唾を飲み込んだ。私の心は久しぶりに好奇心あふれる子供心のようにときめいた。

ノブを回した。——トウルルル、トウルルル、……電話が鳴つた。

私の夢が一変に覚めた。

私はノブから手を放して、慌ててベッド側のサイドテーブルにある電話の受話器を取つた。

「松木様、奥様からお電話です。お取り次ぎなさいますか」

とホテルの受付の声。――どうして理恵がこの電話番号を？

「つ、つないでくれ」

「承知しました」

受付の声がして、しばらくの後。

「松木だな」

男の声がした。全く知らない男の声だ。

「誰だ、君は？」

「あんたの娘が家出したぜ。自殺するかも知れない、あんたらの離婚のせいだな。そこにいる女と楽しむのも結構だが、あんたに少しでも親心があるんなら、早く捜しに行った方がいいぜ」

「おい、娘が家出って……どういう……」

私が尋ねる前に電話は強引に切れた。

私は急いで自宅に電話を入れた。だが、いくら待っても、誰も応対に出なかつた。

本当に家出？まさか自殺なんて

私は慌てて服を着た。今の私は父親の私に戻っていた。

「どうしたの？」

早苗がバスタオルを巻いて、浴室から出てきた。

「娘が家出したんだ」

「家出？」

「悪いけど、帰るよ。済まない」

私は服を着替え終わると、早苗に頭を下げて、部屋を出て行った。

十二

「これで旦那の方も捜しに出かけるだろう」

南原は受話器を電話に戻した。

南原と理恵はマンションの前の路上に止めた赤い乗用車の中にいた。

「行かないんですか」

助手席の理恵は運転席の南原に尋ねた。

「どこへ？」

「明美たちを捜しにです」

「心当たりはあるのか」

「いえ……」

「じゃあ、動いても仕方あるまい。下手に違ったところへ行けば、二人の命取りになる」

「でも、このままじっとしてたって同じです」

「まあ、落ち着け。待てば海路の日和ありつていうだろ」

「そんなこと言つたつて、娘が自殺するかも知れないのよ」

「だから、待つんだ。確実に明美のいる場所がわかるまでな」

「わかりました」

理恵は今は南原を信じるしか手はないと思い、納得した。

「それより、あんたの家族の話でもないか」

「家族の話って？」

「松木家の家庭を二分するきつかけとなった事件の話さ。仮にカナリヤ失踪事件とでもしておこうか」

「南原さん、どうしてその話を？」

「こいつさ」

南原はコートの内ポケットから封筒を取り出した。

「それは？」

「松木明美の遺書だ。父親の部屋にあった」

「夫の部屋に？あなた、家に入ったんですか」

理恵は南原を疑いの目で見た。

「まあ、そんなことはどうでもいい。それより、話を続けるぜ」

南原は理恵に詮索する暇を与えず、話を続けた。「この遺書によると、今から四年前、あなたの夫は会社でも特に部長からかわいがられ、課長への昇進も夢ではなかった」

「そんな頃もあったわね」

「そのころの松木の家庭生活は当時十才だった明美の目から見れば円満だった。実際にはもう夫婦の仲は冷えきっていたんだけどな」

「随分、はつきりと言ってくれるわね」

「あんたらの結婚するまでの過程を見れば、わかるさ。あんたは結婚当時二十才、まだ遊びたい年頃だ。一方の松木は二十三才、まだ社会人となって一年目だ。あんたと松木の出会いが渋谷のディスコ。その日のうちに意気投合し、

酒に酔った勢いで、そのままホテルで肉体関係を持つてしまった。そこまではまだよかつたかもしれない。むしろ、その後が悪かつた。それは妊娠だ。あなたは最初はおろす気だつたが、社会的に地位のあつたあなたの父親は子供をおろすことに反対し、松木と無理矢理、結婚させた」

「どこでそんなこと、調べたの？」

理恵は顔を曇らせた。

「情報網は広いのさ。あなたのことは、あんたよりも詳しいかも知れないぜ」

南原はククツと笑つた。

「恐ろしい人だわ、あなたは」

「まだ、続きはあるぜ。結婚後、仕方なくあなたは子育てに専念した。まあ、夫としての松木もそれほど悪い男ではなかつたし、生活も安定していたから、あんたも自由は少なからず制限されるものの不満を持つことはなかつた。それに、松木は就職三年目にして係長に就任するという出世ぶりを見せたため、家庭内の不和を抑えなければならなくなつた。一度、出世コースに乗つた人間が弱点を見せてはならないことはあんたも当然、わかつていたから、どんな些細な不満でも我慢して、円満な家庭を装つていた。家庭に一切の不和を持ち込ま

ないという努力はあなたにしてみれば大変だったろうな。だが、近所付き合いにおいては夫の出世は自慢だったから、その時には気にならなかつたかも知れない。

ところが、四年前の夏、部長の家族旅行の間、一週間ほどカナリヤを預かることになった。このカナリヤは南米産で、部長婦人が十年以上も可愛がつてるペットだ。

そのペットが預かってから四日後の朝、鳥かごの中から消えた。あなたに世話を任せつきりにしていた松木は当然、あなたを責めただろう。だが、前日の晩はあなたは親戚の家へ出かけて留守、松木本人も同僚と飲んで帰ったため、記憶がない。結局、誰の責任かと喧嘩したところで、水掛論にしかならず、期日までの数日間、懸命にカナリヤを捜しまわったあげく、とうとう見つからなかつた。

松木は部長の怒りをかい、その後は会社で執拗な嫌がらせを受け、係長の椅子からも降ろされた。そして、家庭でも出世の道を失った松木は完全に無視され、孤立化した。

以上が松木家崩壊の簡単ないきさつだな」

「他人から私の家庭の話を知るとは思わなかったわ。でも、その通りよ。あの人は自信家だったけど、事件の後はすっかりおとなしくなっちゃって。私が何を言っても、逆らわなくなっちゃったわ。私ももう我慢する必要もないから、好き放題やっちゃって。すっごく楽しかったわ」

「松木がかわいそうだとは思わなかったのか」

「別に」

「松木の学生時代を知っているか？」

「知らないわ。別に聞きたいとも思わなかったから」

「俺が調べたところじゃ、松木は中学の頃まで、いじめにあっていたそうさ」

「一度、自殺未遂も起こしてる」

「まさか……」

理恵は笑ったが、それは表情になっっていなかった。

「松木は元々、母親を早く亡くし、祖母に甘やかされて育てられたせいとか、人見知りが強くて、気が弱く、おとなしい性格だった。しかも、運動も勉強も全く駄目だったから、まあ、いじめの対象にされるのも当然かも知れない。そんな松木を立ちなせようと、彼の父親は彼を高校へは行かせず、徹底的に勉

学と運動の両面から鍛え上げた。松木は日に日に自信をつけ、大学検定の資格を一度で取り、そのまま大学受験であのW大学に合格した。だが、彼の父は松木が大学に入学して三ヶ月後に病死した。

その後の松木は何をやっても成功し、ますます自信をつけた。彼の臆病な性格を強く支えていたのはまさに自信だけだったんだ。だから、あの事件で希望を断たれてしまった時、松木にはもう支えるものが何もなくなくなってしまったんだ

「それがどうしたっていうのよ。私にはそんなこと、関係ないわ」

「松木はカナリヤを逃がしたのが誰だか知っていたんだ」

「え？」

「彼は知っていて、わざと君を責め、そして犯人が誰かということをやむやみにしようとした」

「どういうこと？」

「事件の前日の夜、松木は確かに酔って帰ってきた。だが、一緒にいた同僚の話では彼は正体を失うほど飲んではいなかった。自宅に戻った時、松木は犯人からカナリヤが死んでしまったと告白を受け、泣きつかれた」

「死んだ？」

「そう。犯人は興味半分にカナリヤをかごからだし、友達に自慢しようと友人宅に連れていった。カナリヤは飛べないように羽を切られていたから、遠くへ逃げられることはない。犯人も思ったのだろう。しかし、友人宅の帰り道、横断歩道で信号待ちしている際、カナリヤが僅かな隙をついて犯人の手から逃げたんだ。だが、不幸にもカナリヤは一メートルも飛べず、目の前の路上に降り立った。そして、走ってきた車に潰された……」

「南原さん、もしかして犯人と言うのは……」

「松木明美。あなたの長女だ」

「でも、主人はあの時、一言も……」

「恐らく、松木も迷ったんだろう。カナリヤがいけない以上、もう出世の道もあんなとの縁も終わりだ。だが、娘に責任を負わせれば、この先、明美はカナリヤを殺したという罪、そして父親の出世を台無しにしたという罪を背負って行くことになる。だから、松木は明美をかばったんだ。彼には虐められる者の苦しみがわかっていなかったからね」

「……」

理恵は返す言葉もなく、南原の話を黙って聴いていた。

「このことは明美の遺書に全て書いてある」

南原は理恵に封筒を手渡した。「松木は出世はおろか、家族の愛情にまで見放された。そのことを一番、痛感していたのは明美自身だったろう。だが、彼女は恐くて真実が口に出せなかった。その間にも父親は毎日のように母に詰られ、家の厄介者にされていく。そして、ついに離婚の話が持ち上がった時、明美は苦しみに耐えられなくなり、自殺を決意したんだ」

「もう、やめて……」

理恵は頭を抱えた。「私が……私が一番、家族を傷つけていたのね……」

「気にすることはない。あんたら家族は愛情を欲しがるばかりで与えることを忘れた。それだけのことだ」

南原がそう言った時、電話がなった。南原はすぐ受話器をとる。

「——おい、遅かったじゃないか。場所はどこだ——うん、ああ、わかった——いいか、目を放すなよ。すぐ行くから。じゃあ、頼んだぞ」

南原は受話器を置いた。

「場所がわかったんですか」

「N里海岸近くのホテルだ」

そういうと、南原はキーを回して、エンジンをかけた。

十三

明美は波打ち際に座って、遠くを見ていた。この暗闇では海と空を分ける地平線しか見えない。だが、明美が見ているのは目の前の風景ではなく、遠い昔に存在した家族の風景であった。その風景の父は笑っていた。母も、弟も……ただ、そこにはなぜか自分の姿はなかった。

「あなたが産まれなければ、——」

母が幼い私にそんなことを言っていた。自分がいなければ、父と結婚せず済んだのに。母はきつとそう言いたかったんだろう。だが、私は生まれてしまった。もともと家族になるべきでない男女に無理矢理、家族を作らせてしまった。

風は絶え間なく明美の顔に吹き付けていた。その風は冷たく、呼吸を困難にした。波の音は明美の心はますます憂鬱にした。考えれば考えるほど、その思

考は暗い方へと進む。海は明美を海へ誘い込もうと、波を砂浜に走らせ、足元をすくう。海の水は死人の手のように冷たかった。

明美はゆっくりと腰を上げた。そして、砂浜に最初の一步を踏み出した。それは至つてたやすいことだった。

これなら五〇歩くらい簡単に進めるかも知れない。明美はそう思った。

一步、一步、遙かなる海へ向かつて明美は足を進めた。足が海に浸かっても、もう冷たくはなかった。むしろ、気が遠くなりそうな感じがして、気持ちよかった。

膝まで水が浸かった。——もう少しだ。

明美は心が弾んだ。遠く向こうには楽しい何かがある。明美は本気でそう信じていた。「お姉ちゃん！」

子供の声が明美の耳もとに飛んだ。だが、明美は足を止めない。

「いやだあ、死んじゃやだあ」

哲夫は懸命に砂浜を走り、海に飛び込んで、ほうようにして海をかき分け、明美の後ろから抱きついた。

明美は背筋に電気が走つたようにビクツとして、後ろを向いた。

「哲夫……」

「死んじや駄目だよ。姉ちゃん、死んだらやだよ」

哲夫は泣きそうな顔で言った。

「もう遅いよ。お姉ちゃんは生きてちやいけないの。哲夫、わかつて」
明美は優しい声で言った。

「なんでだよ」

「……哲夫、ホテルへお帰り」

「帰るんなら、お姉ちゃんも一緒だ！」

哲夫はそう言い張り、明美の服を放さなかった。

「哲夫……優しいんだね」

明美は哲夫の頭を撫でた。「一緒に行つてくれる？」

「え？」

哲夫は明美の顔を見た。

「哲夫も一緒なら姉ちゃん、寂しくないから」

明美は笑顔で言った。哲夫はしばらく考え込んでから、
「うん！」

と元氣よく言った。小学生の哲夫にも明美の決心がもう揺るがないことがわかった。

「じゃあ、行こう」

明美は哲夫の手を引いた。

二人は地平線へ向かって歩き出した。

海の深さはもう哲夫の口の辺りにまで達していた。しかし、二人は歩みをやめない。

どこからかモーター音が聞こえた。明美はまるでそんな音は無視していたが、哲夫の顔には笑みがこぼれた。

モーターボートが明美たちの数メートル手前で止まった。

「ここまでだ、明美ちゃん」

その言葉に明美は顔を上げた。

「南原さん……」

明美の目から自然と涙がこぼれ落ちた。

「どうせ捨てるんなら、その命、俺にくれないか」

南原はボートの上から海に浸かっている明美を見おろして言った。

「……」

明美はただ口元を震わせ、黙っていた。

南原は先に哲夫の手を引つ張って、ボートに乗せた。

「離婚は中止になったよ」

「え……」

明美は驚いた顔をした。

「お母さんはもう離婚はしないって。どうする、それでも自殺する？」

南原は手を明美の方に差し出した。

明美は嬉しさで、頬を緩ませながら、南原の手をぎゅつと握った。

「南原さん、ありがとう……」

明美は唇を震わせながら小さな声で言った。

十四

自宅に戻ってから私は明美の学生名簿を頼りにあちこちに電話をかけていた。

明美がなぜ自殺するのか。考えられることはあのカナリヤのことだ。しかし、明美は四年間、一言もあのことには触れていない。私だって、あのごとは忘れたのだから、明美がずっと気にしていたなんて考えられない。何か他に原因があるんだろう。

まさか明美が離婚のことを知って——いや、明美はもともと私のことは嫌っていたから、それならば大喜びのはずだ。現に明美が私のことを慕ってくれたのはあのカナリヤ事件の時だけだったのだから。

結局、明美の友人の中で明美の所在を知るものはいなかった。他に手がかりと言っても、私は明美と特別どこかへ出かけるということもなかったし、話すことも余りなかったので、全く思い浮かばなかった。父親失格と言われても仕方のないところだ。

そういえば、あの時、会社の前に明美がいたのは私に何かを相談したかったからなのだろう。だが、私はよりによって早苗と一緒にいた。それが明美にどんな影響を与えたかはわからない。しかし、私があそこで明美を追いかけなかったのは、私自身、自分の娘よりも早苗のことを愛した結果だった。父親失格と言われようと、あの時だけは早苗と別れるのが嫌だった。今にしても、私が

明美を捜すことについて、なぜそうしなければいけないのかというわだかまりが残っている。

ピンポーン。

玄関の呼び鈴が一度鳴った。

私はドアの方へ目をやった。ドアが開いた。

「理恵……」

「ただいま」

理恵は静かに言った。

「明美が——」

私がそう言いかけた時、理恵が遮るように

「明美は入院したわ」

といった。

「入院？」

私は立ち上がって、理恵のところに歩み寄った。

「大丈夫よ。冷たい海に入って衰弱しただけだから」

「それじゃあ、やっぱり自殺を？」

「ええ」

「そうか……」

「あなた、なぜ理恵が自殺しようとしたか、わかる？」

理恵は私をじっと見つめた。

「……」

私は答えられなかった。

「私のせいよ」

理恵は言った。

私の理恵の意外な返事に驚いた。これまで自分の否は決して認めなかった彼女なのに。「——そして、あなたのせいよ」

理恵はさらに付け加えた。

「それはわかっている……」

「わかっているわ。あなた、本当に明美のこと、愛してた？」

「それは……」

理恵の質問にはぐさりとくるものがあつた。

「私たちの結婚は初めから明美だけの結び付きだった。明美が産まれなければ、

私たちは結婚することはなかった。だから、嫌なことがあると、明美がいなければ、なんて考えてた。そうじゃなくて？」

「……」

「——私はそうだったわ。私は自然と結婚への不満を明美にぶつけていた。そして、私の影響で明美はあなたに馴染まない子に育っていった」

「それだけじゃないさ。俺自身も明美に対して、ただなついてくれないと嘆くばかりで何の努力もしなかったんだ」

「四年前のカナリヤがいなくなったこと、あれは明美のしたことだったんでしよう」

「いや、あれは……」

「隠さなくてもいいわ。もうわかってるから。私ね、正直言って明美があなたに相談したことにはショックを受けたわ。今まであなたのことを嫌っていると思つたのに、本当はあなたのことが一番好きだったんだ、てね」

「そんなことはないさ」

「明美は私を恐がっていたのよ。あなたが私に非難されている姿を見て、自分も私にひどく叱られると思つたのね。だから、真つ先に自分が頼れる人、つま

りあなたに相談した。そして、あなたは明美をかばった」

「俺は明美を傷つけたくなかった、それだけだよ」

「あなたも私が明美のことをひどく叱ると思っていたんでしょ」

「そ、そんなことは……」

「別に否定しなくてもいいわ。本当にそうだったんだから。私は嫌な女だった、母親としても妻としても。自分だけが悲劇のヒロインだと勘違いして、周りの人のことを考えなかったのね」

「理恵……」

「ふふふ、私がおんなこと言うなんて意外でしょう」

理恵は照れくさそうに笑った。

「そんなことないよ」

私は思わず理恵を抱きしめていた。

「ちよつと苦しいわ」

「済まない」

私は理恵から離れた。

「もう一度、やり直さない？もうお互い愛なんてないけどさ、家族として仲良

くやっついていきましょう。私も頑張るから」

「俺でいいのか……」

「あなたでなければ駄目よ」

理恵はチュツと私に口付けをした。

「あ、ああ……」

私は顔がぼうつと熱くなつて、呆然となつた。

「これで今までのお詫びよ」

理恵はそう言つて、台所へ姿を消した。

私はしばらく廊下に立ち尽くしていた。人生の中で最良の喜びだった。妻の心境変化の理由などどうでもよかつた。今の心のときめきがいっまでも続いてほしい。それだけを願っていた。

十五

「南原さん！」

早苗は南原探偵事務所のドアを蹴り開け、ものすごい剣幕で入ってきた。

「よお、久しぶり」

相変わらず机に足を投げ出して雑誌を読んでいた南原は、雑誌をマガジンラックに投げ入れて、挨拶した。

「久しぶりじゃないわ。よくも私の仕事を邪魔してくれたわね」

早苗は南原の机の前に来て、南原をにらんだ。

「仕事？何のことだ。結婚するんじゃないのか」

南原はとぼけた顔をして言った。

「結婚なんてするわけないでしょ」

「断わられたのか？」

「違うわよ」

早苗はちよつと呼吸を整えて心を落ち着かせ、「そう、あくまでシラを切るのね」と鋭い口調で言った。

「冗談だよ、そう恐い顔するなよ。要するに松木理恵が依頼を断わってきたっていうんだろ」

「やっぱり知ってるんじゃない」

「ああ。君は松木理恵から夫と離婚したいから、浮気を仕組んでほしいと頼ま

れた。成功報酬は二百万。計画を実行するにあたり、後で裁判ざたで疑惑をもたれぬよう君は四カ月前から松木のいる会社に社員として潜り込み、機会を伺って松木に接近した。そして、松木に浮気をさせて、一気に離婚を成立させようと企んだわけだ」

「ちよつと、どうしてそこまで知ってるわけ？」

「結果だつて知ってるぜ。何とか松木をホテルに連れ込み、後は関係を結ぶだけ、いや実際には睡眠薬でも事前に飲ませて関係を持ったという証拠写真を撮り、離婚の決め手にしようというところまできた。ところがホテルに妙な電話がかかってきたために松木はホテルから出ていってしまった。さらに翌日に契約を取り消す電話があつた」

「やつぱり南原さんが仕組んだのね」

「お互い様だぜ」

「どうしてよ。いつも仕事に公私混同はするなといいいながら、こういう時は邪魔するわけ。最低！」

「俺だつて仕事さ」

「私の仕事を邪魔するのが仕事なわけ？」

「いいや」

「じゃあ、何なのよ」

「それを言う前に君に言っておくことがある」

南原は足を机から降ろし、早苗を見た。

「何よ」

「君は今度の仕事を受ける以前から俺に内密で五件の依頼を私的に受けている」

「そんなの勝手でしょ。私はあなたの部下じゃないんだから」

「別に悪いとは言わんさ。だが、依頼は事務所に来たものだ。君に来たんじゃない」

「わかってるわ。南原さんに黙ってたのは悪かったわよ」

「君は事務所を自分で持つのが夢だから、多少のことは我慢してきた。だが、今度の依頼に関しては許すわけにはいかん」

「勝手に事務所をやめたこと？」

「そんなことはどうでもいいさ。君は理恵の依頼に対し、どの程度の下調べをしたんだ」

「一応、経歴ぐらいは調べたわよ」

「じゃあ、松木と理恵を離婚させた場合、娘の明美が自殺する危険性があることは考えたわけだな」

「自殺？まさか明美さんが……」

早苗の表情が曇った。

「自殺しようとするところが俺が助けた。命には別状ない」

「そう」

早苗は安堵の息をついた。

「探偵と言うのは汚い商売だ。決して人に誇れるようなもんじゃない。だが、人間としてプライドを捨てるな。それを捨てれば——」

「わかってるわ、そんなことは。あなたと五年も探偵やってきたんだから」

コンコン——

ドアを叩く音がした。見ると、ランドセルをしょった松木哲夫が入口に立っていた。

「オッス！」

南原が先に声をかけると、哲夫も「オッス！」と元気に挨拶する。

「どうだ、姉ちゃんは？」

「大丈夫、元気だよ」

哲夫は軽い足取りで、南原の机の前まで来た。

「助けてくれて、ありがとう」

「仕事だからな」

南原はニヤツと笑った。

「これ、依頼料」

哲夫はランドセルから貯金箱を取り出し、机の上に置いた。「少ないけど、

僕の全財産」

「どれどれ」

南原は貯金箱を手を取った。重たく揺らしても音がしないほど詰まっていた。

「金額はどうあれ君の努力が詰まっているな。だが、受け取れないな」

南原は哲夫に貯金箱を返した。

「え？」

「今度の仕事はこのお姉ちゃんのおかげなんだ。だから、彼女にあげてくれな

いか」

と早苗をちらりとみて、言った。

「うん、いいよ」

哲夫は貯金箱を早苗に差し出した。「はい、お姉ちゃん」

「あ、私は……」

早苗は戸惑った。

「受け取ってやれよ」

南原が目配せした。

「じゃあ、ありがたく受け取るわ」

早苗は哲夫から貯金箱を受け取った。

「それからね、南原さん、お姉ちゃんから手紙を預かってるんだ」

哲夫は南原に手紙を渡した。「きつとラブレターだよ」

「だといいがな」

「じゃあ、僕、これから病院に行かなきゃいけないから、帰るね」

「おう、姉ちゃんに困ったことがあったらいつでも来いって伝えといてくれ」

「それはデートの時、言ったら」

哲夫は冷やかすように言った。

「そりやそうだな」

「さよなら」

哲夫は事務所を出ていった。

「ねえ、もしかして南原さんの依頼人って哲夫君なの？」

「その通り。明美の様子がおかしいから見張ってほしいって。最初は引き受けようかどうか迷ったが、取り合えず、両親に話を聞こうと、松木の勤めている会社に出向いた時、偶然にも早苗が勤めていたんでね。早苗が何を調べているのか探るついでに、依頼を受けたってわけさ」

「なるほどね。今回はもう言うことないわ。南原さんがいなかったら、人を死なせるところだったんだから」

「ところで、辞表はどうする？」

南原はひきだしから辞表を取り出した。

「返してくれると、嬉しいんだけど」

早苗はちよつと控え目な態度で言った。

「いいよ」

「本当に！」

「ああ」

南原は早苗に辞表を返した。

「さすが南原さん、心が広い」

早苗はニコニコ顔で南原を囁した。

「いや、そういつてくれると嬉しいよ」

南原は椅子から腰をあげ、そろそろと出口の方へ歩いていった。

早苗は封筒を開いて、中を覗いた。

「あれ？」

辞表以外にも何かが入っている。クレジットカードと借入金明細だ。早苗は明細を見た。借入金は五十万円だった。

「ちよつと南原さん、何よ、これ」

南原はギクリとして立ち止まった。

「ひ、必要経費だよ」

「だって、これ、私のカード——ああつ、まさか、車の中で私のバッグからカードを」

「ピンポーン、正解です」

「さ、詐欺じゃない」

「君には払う義務があるよ」

「どうして？」

「だって早苗ちゃん、貯金箱受け取っただろう。報酬を受け取ったんだから、君が払わきゃ。それじゃ、後はよろしく」

南原は慌てて事務所を逃げ出した。

「ま、待って！」

早苗が南原を追いかけようとした途端、椅子に足を引っかけ、床にすつころんだ。

「いたあい……もう南原光次郎のバカヤロー」

早苗は事務所で一人、床に座り込んで喚き散らした。

「恋心」 終わり